

4 駆除方法

<緊急時>

港湾や空港等のヒアリの侵入の可能性が高い区域などでアリ類を発見した場合、また、疑わしいアリ類のスクリーニングや同定のためサンプル採取を行う場合、発見した個体を即効性の薬剤で殺虫処理します。なお、港湾等以外の場所で疑わしいアリ類を発見した場合でも、業務や日常生活に支障がある場合は、ヒアリと同定される前でも、可能であれば駆除して構いません。

ただし、在来アリがヒアリの侵入を抑制している可能性もあり、無計画に大量の駆除を行うのはかえって外来種の侵入のリスクを高めかねず注意が必要です。

【殺虫剤】

★ 市販のエアゾール式殺虫剤又は液剤（ピレスロイド系など即効性のもの）

【手順】

- 1) 念のため、発見場所の周囲を改めて目視点検して生息状況を確認します。
- 2) 発見した個体に直接噴霧します。（エアゾール式の場合はアリが飛び散らないようにする）
- 3) 液剤の場合はそのまま散布するか、製品のシャワーノズルや農薬用の噴霧器等を使います。

【注意事項】

- ・ 処理中にアリに刺されないよう注意してください。
- ・ 液剤の人体への吸入や皮膚接触などに注意してください。
- ・ 用水や河川沿いでは雨水による流れ込みに注意してください。

※発見したアリ類の近くにアリ塚を発見した（営巣していた）場合は、攻撃される恐れがありますので、いたずらに巣を刺激せず、直ちに施設管理者や行政等の関係機関に連絡してください。

<防除措置>

ヒアリと同定された発見個体が多数であった場合や、周囲の状況からまだ隠れた個体がいる可能性がある場合などの防除措置としては、上記の即効性薬剤のほかに、隠れた個体や巣などを効率的に駆除できるベイト剤などの遅効性の薬剤や、くん蒸剤等を併用します。

【殺虫剤】

- ★ ベイト剤（毒餌）
- ★ 液体型殺虫剤（フィプロニルなど遅効性のもの）
- ★ くん蒸剤、くん煙剤

※いずれも市販のもので可

※遅効性の薬剤は、毒餌を巣に持ち帰ったり、薬剤の付いた身体で巣内の他のアリと触れ合うことで殺虫成分を伝える連鎖殺虫効果により、巣内全体のアリを効果的に駆除するものです。

※ただし、ヒアリが営巣していた場合は、状況に応じ、即効性のピレスロイド系の液体殺虫剤をアリ塚を囲むように流し込み、塚の中心に噴霧器を差し込んで溢れるまで高圧注入する等して駆除します。また、コンテナの床板内部等での営巣の場合は、高圧洗浄機等による薬剤散布も検討します。

【手順】

- 1) 発見個体の数、場所及び周囲の状況等に応じて薬剤を選択します。
- 2) 発見した個体を即効性の薬剤で駆除した後、遅効性の薬剤（ベイト剤、液剤等）を設置又は散布します。
- 3) 液剤の場合はそのまま散布するか、製品のシャワーノズルや農薬用の噴霧器等を使います。
- 4) 併せて、周囲に粘着トラップを設置して薬剤の効果を確認します。
- 5) 2～3日後に目視と設置したトラップの確認により、生存個体の有無を調べます。
- 6) 生存個体を確認されなくなるまで薬剤の追加、粘着トラップの交換を続けます。
- 7) 生存個体を確認されなくなって以降も、粘着トラップの設置等により、1週間～10日ごとに1か月間程度、確認を継続します。

※ヒアリの侵入経路が明らかになっていない場合は、発見したアリを駆除するだけでなく、女王アリ等が既に外に拡散している可能性も踏まえて駆除方法を検討する必要があります。

※上記によらず、アリ塚やコンテナ床板等を即効性液体殺虫剤の高圧注入等により駆除する場合は、自己判断で行わず、専門業者等の駆除技術を有する者に依頼してください。

【薬剤、粘着トラップの基本的な設置方法】

- ・対象のアリ類が確認できる範囲や周辺に散布、設置します。
- ・周辺では、アリの行動経路と思われる道路沿いや構造物の周囲、側溝、これらの隙間やヒビなどに沿って散布、設置します。
- ・ベイト剤やトラップについては、風雨等による喪失または誘引餌の流失が懸念される場所では、粘着テープ等で固定します。
- ・設置個数、数量は状況にもよりますが、

| | | | |
|------|--------|----------|---------|
| おおむね | ベイト剤 | 5～10m間隔 | |
| | 粘着トラップ | 10～20m間隔 | で設置します。 |
- ・なお、液剤については、製品の説明書にある散布量に従ってください。
- ・ベイト剤は設置後、時間経過により誘引効果が薄れるため、2週間程度で交換してください。
- ・粘着トラップは設置後、2～3日程度で回収、確認し、1週間～10日間隔で設置します。

【注意事項】

- ・ヒアりに刺されないようにし、薬剤散布の際は人体への影響にも注意してください。
- ・コンテナ等でくん蒸剤を使用する場合は、目張りをするなど隙間がないようにしてください。
- ・液剤は薬剤の飛散が多く生態系への影響も懸念されるので、生息範囲が特定でき、集中的に駆除する際に使用してください。
- ・疑わしいアリ個体が多数いて危険と思われる場合や、逃げ出す可能性がある場合等は、無理をせず環境事務所や県、市町村等の関係機関に連絡してください。

※ベイト剤等による駆除を行うと、在来のアリ類にも影響します。在来のアリ類は、生態系に欠かせない役割を持つだけでなく、ヒアリ等の外来種の侵入を防ぐ効果も期待できますので、専門家の同定でヒアリと確認される前に予防目的でベイト剤等を使うのは控えてください。